理人（りびと）は瞑想していた。

意識が澄み切って明鏡のようにさざ波も立たなくなる。しかしその時、鏡のような海から突如、海馬がしぶきを上げて飛び出してきた。真っ黒で、てらてらぬらりと光り、眼は焦点が合わず、あらぬ方向を見ている。

闇雲で理不尽な衝動に駈り立てられ、海馬は理人の愛する者を凌辱し、虐殺し、大事なものを破壊し、彼にとって神聖なものを糞尿で冒瀆し、罵詈嘲笑して愚弄した。根源的な畏怖と、身の奥を掬い取られるような痺れに貫かれる。

理人は海馬を制止しようとした。だがそれが絶対不可能なことがわかっている。魔獣は彼より甚深で広大で巨魁で、細緻で精妙で複雑なのだ。まるで遙かに涯しなく遠く、数千メートルもの怖ろしい深さの海のようなものだ。喩え難い無限のパターンの海流が入り混じり、諸々の現象が生じ、大陸上の数十倍の種類の命が生きる神秘の世界、限りない色彩の数々、又その深みの捉え難さ、波瀾の怒涛や凪ぎの静寂。

深遠なる自然と精密に多岐に複合して繋がっていて、到底人間の１４０億のニューロンでは解明できない。理人はその表面に浮く、数枚の木の葉でしかなかった。時折集まり、又少し離れて揺らぐ。ほんの上っ面でしかない、寄ったり離れたりするその時々にカタチ做す現象に過ぎない。

ただ翻弄されるだけだった。自分がどうなってしまうのか、予想がつかない。どのような運命が待つのかを。

この魔獣がやろうとしていることはまったく理解できない。何がしたいのか、何が目的なのか、引き裂き踏み砕き、破壊しては奇天烈なる魑魅魍魎の群れを生み出すが、どちらが目的なのかはむろん、どこへ向かっているかすらもまったく理性で解明できない。論理では矛盾しかない。理不尽しかない。

無際限なる精緻大量で、偉容溢れ聳えて天空のごとく高らかな海馬に比べれば、圧倒的に脆弱な存在でしかない。寧ろ彼が主であり、理人は眷属の最下層のうちの一人であった。まるで神だ。キリスト教的な神ではない。理不尽で気紛れな、古代の神のようであった。

神がすべての源泉であるように、この海馬が実は理性や正義や自己犠牲の精神や倫理の根源であるように感じられる。

単純な生物の生き方はまるでこの魔獣と直接的に結び附いているかのようにも見える。進化した者ほど乖離するかのように見える。理性ある動物である人間がまさにそうだ。

だがすべての動機は海馬にある。海馬の克服を海馬自身が目指すのか。人はなぜ理性あるのか、客観的自己超越の視点を有するのか。社会性のためだ。組織的に生きるためにだ。人間は組織的に生きるから生物界の強者なのだ。

又単純に考えても、高度な客観性を有する生物の方が個体の生存率が高い。つまりその根源は生存への意志である。まさに海馬の思う壺なのだ。そして生存の背後には大いなる自然が宇宙群より巨大で、荘厳なる姿を奥秘めている。その目的は相変わらず解らないし、抑々（そもそも）〃目的〃って、実在なのか？